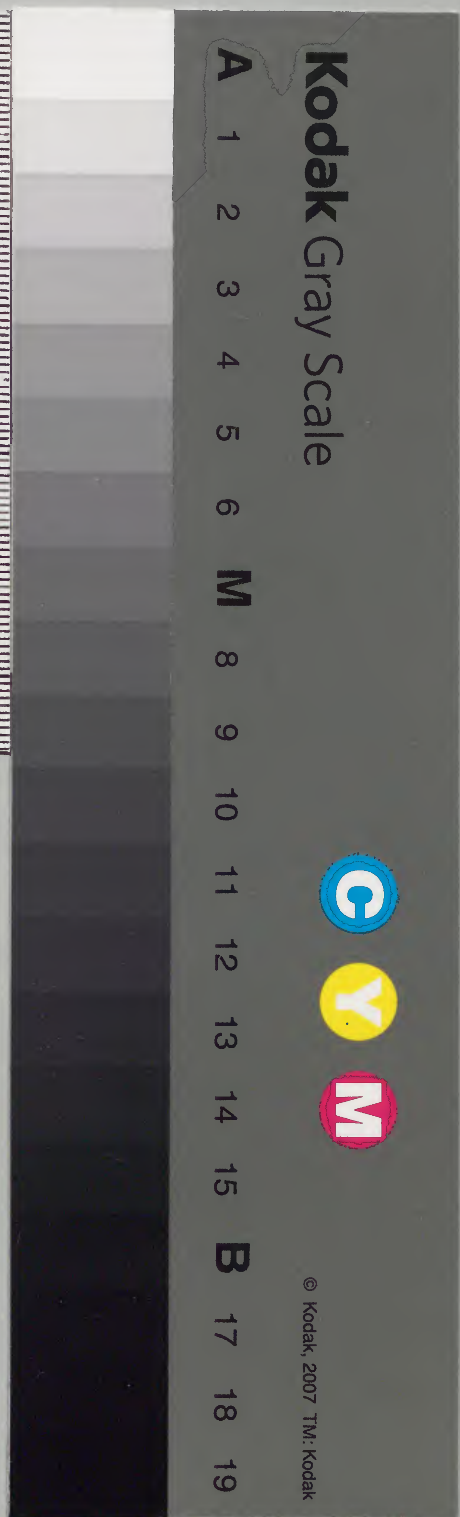


日本書紀傳

四卷 陰

和 一〇五二二 號

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (12)
函號	特 85 1



文部省
印

青政官
印

大正
印

第一

日本書紀傳四之卷

神代上第二

神世七代章

總績重胤

謹撰

一書曰天地初判一物在於

虛中狀貌難言其中自有化

生之神號國常立尊亦曰國

底立尊次國狹槌尊亦曰國

日本書紀傳四

〇一

内一二六八三號

狹立尊次豐國主尊亦曰豐
 組野尊亦曰豐香節野尊亦
 曰浮經野豐買尊亦曰豐國
 野尊亦曰豐齧野尊亦曰葉
 木國野尊亦曰見野尊

天地初判ハ第四第六の一書にも出たり此ハ古事記
 子天地初發之時と有ふと世の初を大凡子云ふとい
 異よりて正しく天と地との初て判れたる時を指て
 云ふあり正書子天地開闢之初と有る此子同ト其ハ
 此傳ありてハ然耳其初て判れたりト事の委トキ
 状九顯ツ子ハ見えざれども第六一書に至りて殊ニ
 明ク子知るめり其ハ其傳ト云べし然レハ此一書
 あり示さずハ其時の有む初判を波自麻流時と訓来
 けりトを記傳ト引れたりトハ波自米能時と訓改
 けたりハ其ト引れたりト孝徳天皇御紀ト其天地之初

万葉二 二十 下 天地之初時之年 三十 下 小乾坤之初時從
 あり有り例證も慥あり事ハ有れども猶欽明天皇
 十六年御紀に天地割判之代 百語拾遺に天地割判之 初ありとも有て割判し
 事を 云々 を以て此の判字は讀有る事を知れども波自
 米氏判流々時とハ訓を附たり 又万葉三下ハ天地之
 の事共ハ已に正書開闢之初 分時從とも有り此等
 の傳小委しく註せり加し 加し の一物ハ正書ハ状如葦
 牙と有とハ別し 一 て彼浮膏の如くありし物を云る
 不 り 若く其葦牙ハ此より 一 て萌騰りし物ハ有れ
 ども其事ハ云ずして混成一物ありける時の事を
 云て凡て天の事ハ載るれざる傳あり是を以て其天

の事ハ別物として上は天地初判とハ云るあり 委し
 時ハ一物生て共より 如葦牙あり物の出判ハ一事を
 云べきあるども其混成一状と其留りて国土の成れ
 る次第と云 〇 在於虚中ハ第六一書ハ生於空中と有
 と同ト事あり古語拾遺に天地割判之初天中所生之
 神云と有れハ天中 アタラシキ 在れりと云けむ其ハ天と
 ハ世の限りを惣て称す名よて天御中至尊の御名小
 懸せり天より事上と云るが如し 其ハ常々天地と云
 云事ハ有れども已に傳一 ハ 天地未割の 下 云る如
 く大きく云時ハ天日をも別天をも天と云るハ 虚
 空をも兼て世を限りを云ひ其 ハ 對へて地と云ハ 國土
 をも月輪をも五星をも含めて地と云ハ 國土
 此の天中の天も其例の天 ハ 此 ハ 天中の天を空
 ありと心得て今本ハ曾羅能耶加と訓るハ誤あり

〇日本書紀傳四

〇三

云は天雲乃退隔
乃極九三丁天雲乃
長都乃限

神皇正統記
者浦安國と見えたり
玉橋の國と有る同ト
國限までも安ん心
て浦安國と號けり
て給へり云々
是れ日本國の事と云
を考合す可なり

但共天中と有る天地の未生ざりし以前の事
其天右の虚中空中の事ハ有れども未曾羅と名ハ
非ずして阿米と耳ハ云りしなり曾羅ハ外在して内
在の對あり其字良ハ物の限と云ひ極と云ふ對あり
其證ハ万葉十五丁安米都知乃曾許比能字良尔
し有を天雲乃曾久敵能極天地乃至流左右尔十
九六丁天雲能曾伎敵能伎波美ふど有ハ天雲の退
方の極とも限とも云ふて其限り極る此方ハ即字
良あり事引合せて曉る可し表裏の裏も其内方ハ在
も思の及ぶて外ハ出ぬ思を云ひ海ハ浦と云も和名
抄ハ大川旁曲渚松隱風所也と有て此も内ハの意あり

云は天雲乃退隔
乃極九三丁天雲乃
長都乃限

古天地の未立ざりし時にて何方^{の限}をも天中
にて謂ゆる高天原ありしを天地出来れり上ハ其形
體を成せり天地ハ神も人も住着く處あり故に其
限り極まる方までを右の如く字良と云ふて其限
より外あり空虚の所を曾羅と云ふなりけり古事
記國生段ハ次生大倭豊秋津島と有ハ後名を以て始
り及ぶし記されたり者ありが亦名謂天御虚空豊秋
津根別と有ハ當時の名あり其ハ始て國形を成して
天御虚空ハ動し見ハれたり由して二柱神此國^{の内}
土着し給ひて始て曾羅と號させ給へりありむと

素問子政伯曰地為
 入之下大虛之中者
 也と有る張氏廣注
 天包地之外地居
 天之中故曰天虛之
 中者也と見えたる
 と思ふ可し

思ゆれば多し其ハ八洲起元章の立於天浮橋之上を
 其第ニ一書子立於天霧之中第三一書子坐於高天原
 と有る虚空と云べき所ありを國土ハ未成ざりし間不
 たり故に天と云を以曉る可し猶虚空を天と云事
 多し祝詞上下津石根
 尔宮柱太敷立高天原尔千木高知と有る虚空の方子
 千木の高く貫き出たるを云あり天傳ハ空傳
 ふあり天飛也ハ空飛也あり天雲と云ひ然多故に天
 天霧と云も虚空あり雲霧を云る者あり
 孫降臨章第ニ一書子居於オホソラ虛天而生兒と有る実物の
 天對ひて其空間を云あり海宮遊行章第四一書子從天
 降者當有天垢從地來者當有地垢實是妙美之虚空彦
 者歟と有る天とも地とも属ざるを以て其中間の所

と虚空と云は是天と地とを内と見て其外あり意不
 り神武天皇御紀及至饒速日命乘天磐船而翔行火
 虚也是郷而降之故因目之曰虚空見日本國也と有
 り此國土對ひて其空虚の所を云る其大虚より見
 留て降坐し由あり崇神天皇十年御紀子仍踐大虚登
 于御諸山岳仁天皇二十三年御紀子有鳴鶴度大虚と
 有る二も右同ト欽明天皇二年御紀子上達オホソラ雲際下
 及泉中ニと有る地底對へて地外を云るあり此等を
 合せて曾羅ハ天地と云物有て其外あり意を詳明し
 む可し推古天皇二十年御紀子夜須弥志斯和餓於明

公餘屋大人説仰天
 と虚空に別分は
 精しく分る事
 有れども分る上
 在れども分る上
 曾羅とも虚空を天
 とし西へ云常
 て天脚虚空を
 云りて記傳に見
 えたり又万葉

者弥能訶白理摩須阿摩能椰蘓訶礙異泥多須弥蘓
 羅烏弥礼麼之有ハ安見為一我大君の隱坐す天八十
 蔭出五す虚空を見者して其天八十蔭ハ御殿の事不
 り然して隱坐の對ニ出五す虚空と云々あるが此ハ
 御座所より出脚せし事を如此く 蘓羅とハ云々あり万葉五子久
 見虚喻十ニ天三空ふども有り云々天雲之外耳管又
 天雲之外從見あり流けたる天雲之ハ發語あり外
 を年言と云ハ弥外處の引合あり曾羅ハ外在る
 證ニ備ニ可一印度ニ天を曾羅と云々我古語の傳
 ハれりあり可一宋米帝と云者の書史會要ニ皇國の
 僧寂照ハ彼國語一事を記せり天則云曾良と
 有ハ彼ハ空を指して此を何と云々と問へりしハ
 其事と心得て答たりあり可一然るすハ梵語と此の
 語と合へり取りて其問〇状貌難言とハ右の一物の
 答へたりともやはひ

又物と云々云々素形
 として其形骸を信じて
 して有の任り云々
 素形素形と云々
 素形素形と云々
 素形素形と云々
 素形素形と云々

形容の如何とも號く可くめを云あり形骸ハ紀
 中ニ容貌とも作り此ハ高皇產靈尊神皇產靈尊の產
 靈ニ資て空氣無質あり天中ニ初て形貌作れり一物
 の成出たり其一物の條理を云むとて形貌とハ云る
 あり凡て形貌とも容貌とも書て加多知と云々加多
 ハ其物の體を云事あるが知ハ道も其物の條理を
 美く一たり醜く一たり赤く一たり黒く一たり云々料
 云々あり儀ハ象取語ハ象有して儀ハ彼物の形を取
 情あり云々此物ニ號る事あり樂記ニ禮樂儀天地之
 取ハ理想ニて寫し得べく云ふを語と云も其象を聞
 引合せし難言とハ其天中ニ成出たり一物を一物と
 曉る可し

迄ハ云たりーりども其状貌を云子至てハ言も断え
 意も及ハざるあり實ハ其極意を云子及てハ古事記序子夫混元既凝氣象未效
 無名無爲誰知其形と有が如く此一物ハ一も上子
 如鶏子も游魚も見え下子如浮膏とも浮雲とも譬へたる物
 ありを此子至て如何子下て形貌難言とハ云ありむ
 と考る小傳三如雞子條 及譬條小云る如く物の成れり後
 と未成ざり一前とハ思の外子異ある者あり故小象
 どりも號も為べううぬを上子云る如く物も譬言てハ
 傳させ給へれども水晶の事を硝子の如くと云たる
 にも彼ハ天然の物此ハ人作の物あり差有が如く此

今思所ハ万葉三
 子將言為便將為
 便不知極貴物者云
 こと有が如く可く
 故して云も稱けも
 為へううう物が

小状貌難言と其意を含みたる傳子て甚尊乎五十音
 義訣子此ハ白地子云子難うる陰陽の構合せる貌不
 り一故子状貌難言と云る由子云れたれども何れの
 傳子も然る事あり憚るれら事無れハ此一を諱る可
 子非ハバ有ま欲し説ハ有れども予ハ諾ハず赤縣
 傳子引れたる老子子道之為物惟恍惟惚兮恍兮其
 中有象恍兮惚兮其中有物窈兮冥兮其中有精其精甚
 真其中有信と云ふ其象物の恍惚たるハ此の状貌難
 言子當り次あり精信ハ精神なり事上子古天地未
 割の下子云が如く此ハ次子其中心自有化生之神子相
 類たり其恍惚を又老子子視之不見名曰夷聽之不聞
 名曰希搏之不得名曰微此三者不可致詰故混而為一
 其上不皦其下不昧繩々不可名復歸於無物是謂之狀
 之狀無象之象是謂恍惚と云り莊子知北遊篇子光耀
 不得門而孰視其狀貌窅然而空然不也見えたり

○其中ハ右の一物の中あり上ニ虚中と有ハ天中
ノ一點の物の成出たり謂ふを此ニ其中と云ハ
其一物の全體を云るにて何れハ一處を指て云ハ
非ラあり其ハ身四一書ハ天地初判始有俱生之神ト
有ラ如ク其物と俱ニ生坐て即其物の神ト坐申あり
所以ニ古事記ハ此段の神等の事を隱身也ト有ラ
其事傳三神聖條及乾註セラガ如ク中ト云言の委一
通獨化條小註天御中主尊の下小説く可一○自有化生之神の自ハ自然あり其ハ
第二一書上ニ先物を云て次ニ因此有化生之神第
六一書右の例にて因此化神トニ所ニ出たりトハ

又上引ノ老子子
云有り物有て其中
ニ精神有ラ次第を
此ト思ハ可一

別ニて此ハ上ニ一物ト云て其形貌を何トも指て號
け言ふラ故ニ因此トハ云へラ故ニ自然トハ
云ラ者あり此を於能豆加良ト云ハ已著在ニて已
ハ石の一物子係リ著在ハ其一物ト共俱ニ在を云ふ
リ躬又親を美豆加良ト云ハ身着在ニて自然の他ハ
上ニ有ラ反あり又辛一ニて自物するを辛豆加羅ト云
ラ不ト都加良ハ物ト相化生之ハ古来成出流ト讀ハ
離ルぬを云事不ラあり
リ然ルハ此ハ強て化字ニ泥む可キ所ニ非ズニ柱産
靈神の靈威ニ資て此一物を産成シ給ヘラ其物子自
然ニ神の成坐ラ事譬へハ人子を産メハ精神ハ其體
子具ハれラガ其精神ハ人體ト共ニ成て其主ト

今易天地相繼万物
化醇男女攝精万物
化生と有る取れり又
言通證引る草木子
に化生者非胎非卵
隨氣化而成る云り

成れざるを思ふ可傳三子化為神ふと云ハ其物の皆
辨へたるが如化生字公素問の物生謂之化物極謂
之愛と云ひ列子載る老聃の語も造化之所始陰
陽之所愛者謂之生謂之死窮數運變因形移易者謂之
化不と有るより出たりふり然れども此ハ然計りの
急めて用るれたる○國常立尊正書よ出傳三の七〇
ハ有べり旁三書よ出たり各義
國底立尊ハ國退立と申す同上祈年祭詞ハ天能壁
立極國能退立限と見えたる其天ハ天底立尊の御す
別天子て恒星の羅列りて天垣と成れり故アンノカキクソ天子壁立
命とも申す御名坐り其子對へて國能退立限ハ日天
よて天日子從ひ巡る五緯星ハ皆此大地の所屬よて
謂ゆる國底ありけれハ其を建給へる神子御在せり

其事傳三天先成と地後定との下云々が如し又第
三、一書よて天底立尊の下云々を彼此見合せて曉
了可五星ハ國より退て立る國あり其限りハ土星
よて日天と別天との界子在る國よて御光の及ぶ限
あり故に國底よて謂ゆる退立限あり者あり然れど
も右の土木火金水の五星の中よても土星木星ふど
の如きハ大地よりも若子子大ありを地の所屬あり
と云事ハ如何あり如く思ふ人も有るを今此を論
さハ水星金星ふどハ天日子近く火星木星土星ふど
ハ天日子遠きを此大地ハ其中分子在て其御光を受
る事宜しきと適へるを以思ふハ大地ハ其五星の偏

寒偏熱ありといひ此上無く氣候正しく有て其真亦不
ろ可美固まて有れば假令其廣く大ありも猶末の本
國と云者あり其此大地子ても萬國有て中子皇國の
細ふれども北極出地三十度より四十度の間東は
り西は長く在て謂ゆる正帯の國あり其同ト正帯
の地方悉く皇國の如く善いなり獨皇國耳
万国子勝れて何恰國ありか如く土地の大小は依り
ハ非るあり然れば今ハ五星の説に當て云ひハ大地
ハ皇國の如く月ハ琉球ふども當り五星ハ赤縣印度
及外外子在る大國の如くあり然れば其大國共ハ
一に皆あり皇國の御奴として任奉る可き國あり
を以曉諸其五星も國あり事ハ傳一天地未子も引て
可し割餘
註せり一如く天孫降臨章子二神遂誅邪神及草木
石類皆已平了其所不伏者唯星神香香背男耳故加遣

倭文神建葉槌命者則服故二神登天也と有ハ此國土
を討平けて皇御孫尊を天降し奉給りむとて征伐の
大御使を降し給へりあり小大地の障とも成ぬ星神
の不伏ればとて其を討平げ令給ふ事ハ一も彼ハ上
子云々如く國の退たり傍國を其子携息心神と
雖も皇御孫尊の大御趣け子徒奉る可き理あるは了
り其香香背男ハ螢惑星あり由古くも云々其即火
星あり此一を以て餘の四をも推し人思ふ可し又其
一書子ハ天神道經津主神使乎定葦原中國時二神曰
天有惡神名曰天津彥星亦名天香香背男請先誅此神
然後下撥葦原中國と有る天ハ天經或問子減一尺地
則多一尺天と云よて日月諸曜の懸れり天あり地も

亦其天中の一物なりが地々遠く天の方々望むが故
天有悪神と云ふハ云ル其実ハ国あり事上と云ふ
如記傳三九丁小底とい上小在ル下小在ル横小在
ル至り極まらるる處を何方まで云り万葉十五子安米
都知乃曾許比乃字良尔と有るを以天子も云へき事を
知べし又六子筑紫尔至山乃曾伎野之衣寸見世常伴
部平班遣之と有る曾伎も極を云て同ト事あり
と云ふ同ト紫式部日記に底比も知ず積らありと云
ふも限も無と云ふ同ト源氏物語ふども此詞有り
若て曾伎ハ曾久を體言と云ふと曾久とハ離放り
意あり離居り遠く退ふとの曾久あり若て其を體
言ハ曾伎と云ハ曾伎たり處を云言ふり又曾許と云
時ハ許ハ彼處此處ふとの處まで曾伎處の意あり故
曾伎と意ハ全同ト事あり皆曾伎も曾許も離放れ
處を云て自然其離放りたり至極の處の稱も通ハ

一云 又四子天雲乃遠隔乃極遠鷄跡裳九子天雲乃退
部乃限十七子山河乃曾伎方半登保美十九子天雲乃
曾伎敵能伎波美又三子天雲乃曾久敵能極と有る
又塞を曾許と訓も境域の極界の地ありを云ふと有
りて底の義ハ聞えたり然れども底ハ國の退たり極
みを云ふて此國土限の事ありを予が底と云ハ此國
土より離れ放れり日天の中子存る右子云る國とを
允て國底と云事ふらあり又常と底と通へる由り説
國ありふら例有る事ハ有らざるも國常立尊と申す
ハ此國慶子限り國底立尊ハ彼五星及月と地外子
存る國子係れり御次國狹植尊上子出傳三の八
名よて各と別あり

但秋詞根國退國
と有る地在る國
て謂り黄泉國
ルハ此と別多し
混ふ可し

國秩立尊の國狹ハ國クニサカ避サカして此大地より分れ去て國
底の立る所由ハ已コト上コト云ハり借其避サカハ退サカして底と
同トキガ立コトハ其國を造立る謂イハレあり此五緯星も
大地と等しく日縦ヒ旋轉マる故ニ其地形を保有ル
あり舊事紀の神代系紀ニ國常立尊の御名を記シて
其下の細書ニ亦云國ニ楯立尊亦云國狹楯尊ト有ル他
の古書ニ亦名と傳ヘたり有ルを取ルるニ有ル有ル
但其ノ統テけて亦云葉木國尊ト記セるハ誤ルあり耳
きハあリずレてハ古の事を熟シ得ル知ルぬ人の推量ニて
定めたる事も多在ルハ從ヒ難シ事耳ニありレも右の
二名ヲ亦名ト奉ルるハ神世七代ト云ハ世數ニも合
ルハ取ルるニ思ハルコト ○次豊國主尊此御名ノ地動の事
此事上ニ云ハり

小依テ負シ坐スるハけり此ハ此御名ヲ首ニ載ルるハた
るハ豊斟ニ尊ト申スるハ此方ノ主ト傳スるハ有
けりハ彼神代系紀ニ國常立尊豊國主尊ト大書ニ並
項ノ人ノ思ハ依ル事ニありレ豊國ト申ス豊ハ動スて
ハ然ル古傳ニ有ルありレ可シ豊國ト申ス豊ハ動スて
晝夜ノ往リ交ル私運ノ名アリ如此クして天日ノ光ハ
向テ故テ天地ノ氣相共ニ和スるハ感シて地上ニ萬物
生シて止ズる事上ニ傳ス三豊斟ト註セるハ如シ國ハ同
春秋ト行テ經ル一年ノ公運ノ名アリ天日ノ周圍ヲ旋
轉ス故ニ天地ノ位定ル是即國土ノ常在ト立ル所由
あり事上ニ傳ス三國常ト立ル尊ト常ト云ハ然レバ豊國ト申スハ大

地の公運子資て私運を成給ふ御功坐る由不り主ハ
成爲ふ事第四一書天御中子云べし此子資て國土
子萬物の成出蕃息りて豊饒あり事偏子其靈威子
有けれハ甚々尊き御事あり平曰翁ハ此神をも
ハ甚味氣也此公運私運を云ふ其主宰の神を
云ぶら自然の事と爲るや世の識者の心こる甚
疑ハ一ハ開平子二柱篇ハ天非自天有爲天者地
非自地有爲地者譬屋宇舟車待人而成彼不自成知有
待知此有待と云る如く舟車の運轉も人を得ば
能運轉する事能はず此を以て國土の旋轉必其主宰
ハ給ふ神坐る事知べし然れハ知らざる限ハ曉り明
りハ主則乱帝王於人其顯且大豈非俱言天之有主宰耶
夫鳥鳳獸麟蜂房蟻垤高有王長况以天地之大時行物
生際上墜下者半圓則九天孰管度之其運其處孰主張
之且也江隍海船越航蜀船京風盛漢渡所凌波豈舟之

自為哉有能師操之若神存有天地主宰先天無始後天
無終其樞軸之全能運于於穆不已者蓋有非人所思議
能及者也故綴歸之天而止也云然計の心ハ着て
も其神代の古傳無き國子生れハ如何とも詮無を
皇國子生れて神代の古説子依あり右の故事の序
綴歸之天而止と云如き人も多きハ如何不や
有レハ云べし傳三七十子如葦牙と云へり一物の萌
騰ハ古事記子生女嶋亦名謂天一根之有レハ其
邊不天根と云處ハ有けろを其海ハ謂ゆる速吸名
門あり其地方ハ豊前國豊後國ふて古ハ豊國と云し
所あり古事記子豊國謂豊日別と見えたり此子因
て思ふ子豊日別と云ハ如葦牙と云し物の萌騰りて
天日と成れり謂あり可し其ハ古事記子亦名を攀

うれたろ筑紫國を白日別豊國を豊日別肥國を連
 日別日向國を豊久士比泥別熊曾國を連日別と云ろ
 其中子肥國ふどハ彼景行天皇十八年御紀ある火國
 の説子依れろ名とも為^ニべけれども他ハ皆某日と日
 子義有へき記一様あり子心をあむ着べかりけろ然
 此ハ大倭と伊豫と筑紫と三相の所子在大海の凹
 き所ハ天日の萌騰ル所一祈よて伊豫と筑紫の断て
 國形の連聯ありも亦其子依れりけり白日別ハ昔明
 たろ意豊日別て動きて天日の別れなり一意あり可
 一神樂歌子日神を豊日女と申奉り用明天皇の大御
 名を播豊日天皇と稱奉ルろふどハ朝日能豊逆登と
 も云て天日の動むが如く見え給ふこ依よて此の豊

△如字音あり物の
 湊まりたる

日別例とい別あり連日別ハ註よて葦牙を云
 一豊久士比泥別の久士ハ奇あり比泥ハ日根よて天
 一根本の如く天日の上れり一根本あり可一彼國子
 一穂日高子穂之峯ふど有も必由有る事あり可く又皇
 御孫尊の此ハ天降坐しも天日親しき所縁有る故
 あり事大夜詞講義ハ云ろガ如し建日別の建ハ多兵
 子通ふ可ハ五十猛神を伊達神とも申す例あり諸多
 兵ハ日旋の旋よて此國より葦牙の如ふり一物ハ上
 り其即日旋と成れろ大地也此子國然ルハ右の天
 在い動も回ルろ起れろ由ある可一然ルハ右の天
 一根本より抽出て如葦牙物の萌騰りて天先成て地ハ
 未定ろざりろども其迹速吸名門て成て天氣を連
 く地下よ吸入て國の動も出來り一故ハ大地の全
 體子亘ろ豊國主尊の御名を負て大古より其地方子
 豊國の名ハ傳ハれり一者ろ祈思たる實ハ萬國の

元首と有る皇大御國ハ一有ければ此大地の運動の
 輻軸たる處必此皇大御國の内何處より有らむ
 と年頃思ふ事ありしを今此に至りて其説を得たり
 ハ甚切樂しき時ありきも猶傳三如葦牙物り下云
 休説子此國在万国之東頭朝陽始照之地陽氣發生之
 最初震雷奮之先土て云るハ諸ルハ此説を以て必此
 大地の東頭元首たる皇國の陽州申土に始りて大地
 の運動ハ此より起るハ何れの國たりと起るも
 彼玄牝之門より天地の根たる
 説をも思ひて熟考ふ可くあらむ
 ○亦曰豊鉏野導
 上ハ豊鉏野導と申すは同本記傳三三下ハ久美ハ久
 毛久牟ふとく通へりと云ルハ如ク但上ハ云る
 共ハ同トク水氣の聚り凝て青雲と成れり意あり
 水ありと汲と云も其あり又物ハ興するありと云る

久美ふども同言あり其ハ天孫降臨章第四一書來目
 部の傳ハ云べし又隱を許母理と云も鉏ふとハ近し
 ○亦曰豊香節野導香節ハ借字首伏して大地の西の
 下より東の首ハ頗頓ハ動むハ故ハ日を面ハして晝
 と成り日を後ハして夜と成る私運を主し給ふ意の
 御名あり加夫斯の例ハ古事記ハ千矛神の御歌ハ夜
 麻登能比登母登須と岐宇那加夫斯と詠せ給へるハ
 倭の一本薄の穂末の撓り状ハ女神の低徊給ふ事
 を譬させ給へるあり又天智天皇三年御紀ハ一宿之
 間稻生而穂垂穎而熟と有る稲穂の實りて其末を垂
 たり加夫斯と云るあり此等を以て加夫斯ハ首伏

あり事を曉る可此岳類ハ四神出生章第十一書
多理保と訓り其も穂の岳下事云々然と有ハ
字書子も類穀實繁頤而岳末也と云り今も物の蓋
を覆ふ事を降すと云り其も天孫降臨章第一書小
其物の首を伏す謂あり是時勝速日天忍穂耳尊立于天浮橋而臨觀之曰彼地
未卒矣不須也頤頤山目并之國歟乃更還具陳不降之
状之有ハ天忍穂耳尊の仰天降の時中天より大地の
旋こと頤き旋る状を見驚らせ給ひて還上坐し傳ふ
り然るハ此大地に居てハ彼大あり子此身の微サ小
るを以て其動ハ古より今に至る迄誰有て一人も
思えたり事ハ無れども今日地を離れて中天子升り

ふとして此大地を顧見たりハ其頤頭カすを見て
誰も驚らぬ人ハ非トヤハ但天神御子と坐本ぐり此
せ給ひて還上り給ひハ如何あり如く思ふ人も有
あめども此尊ハ此土に降らせ給ふ事ハ好ませ給ハ
ぶりハ其耳ありず國の未平らありさることの事
を合せて天神の御許に其降り坐さる由を申しせ給
へらあり事正書及古事記ハこの傳を合せ考ふ可し
或説ハ天日ハ地ハ大あり事百四十三万二千五百倍
子及ふと云り然ルハ其天日ハ此大地ハ火
ふらの如くハ見えけむを良虚空を徑て大地ハ近
附給へむハ其形も大きく成れむを其動ハ將
若く見えけむハ驚らせ給ハぬと云理の無き事ハ
此を以考ふハ大地ハ圓體ハして上下左右有る
事無して何れを首ト何れを尾トも為へらるさる
が如く雖も其ハ古傳無き夷狄の論ハこら有けれ

皇國ハ萬國の東極ニ當リテ首多リ上多リ萬國ハ皇
國の西方ニ羅列リテ尾多リ下多リ成務天皇御紀ニ
以東西為日縱以南北為日横山陽曰影面山陰曰背面
と有テ此國土の事ハ天日子資テ定むる古法あるガ
其を以實セハ其日縱の東極ニ在る我皇國ハ即萬國
の元首あるガ故ニ萬國の先導として天日の方子向
伏し巡ルハ萬國ハ後從して轉リテ息止る是即國の
動ニ首伏しあむ有けり北極直下の域を正と為るハ
神代の古傳無キ外戎の説ハ
北方子僻ルニ邊鄙子て甚ニ異キ國ヲトシ○亦曰
浮經野豐買尊の浮經ハ字の如く野ハ例ハ主あり備

浮云云ハ浮雲浮霧あとの如く虚空中ニ浮べり由亦
リ凡此天中ハ傳三天先成條子已ニ説るガ如く元氣此子
充塞ありて日月星辰を載せて維持る物ありガ其中
子無數の氣脈有テ日月星辰も亦此子懸るガと云事
無し此大地も亦然リ天日の周圍ニ大地の回リて
一歳ニ運行リ復る氣脈有テ又大地ハ此子浮べり不
リ經ハ歷ニて其一歳の公運の内ニ春夏秋冬の節を
歷る事ありガ此ハ已小も云る國常立尊の靈威あり
ガ又此神も御心を戮セ御力を一ニして其神功を幽
賛け給ふガ故小豐買尊と申奉る御名の冠子負せ給

へり者あり 素問曰岐伯曰地為人之下大虛之中者也
大氣者大虛之元氣也万物無不賴之以生故地在
虛之中亦惟元氣任持之耳有浮氣者洛書考靈耀
地有四遊冬至地上行北而西三万里夏至地下行南
而東亦三万里春秋二分其中矣有遠西之說大地
一秋時間子東子向て運轉事三里半余の遠子至
其行度の神速ふ事人智の及ぶ 豊買の豊ハ例の動
可し非すと云ふハ然も有るや
よて買ハ易カよて晝夜と往交りて其氣脈小浮る一
日ここと場りて一歳を經る意あり大地の須臾も息
時無く日こ子新子動る易るを以て萬物も生じて息
ざる義の御名あり賣買の買も此價と彼物とを易る
を云て其子依て佗子利用有り自子利有有る其意を

此子も假借て見り可あり 天家の説大地每歳天日
一箇の本に有て自轉す其本心を轉回し晝すは十二
時を以てす晝晝夜を成す所以あり大地ハ本時体不
れども天日小面す部ハ其光耀を受て白晝と成り
又暖氣を生ず然れども大地自轉の勢ありて天日と反
き暗夜と成る時ハ是故相對す諸國ハ却て白晝と
成り暖氣を受る事猶我ハ天日小對せし時小異あり
事無し此即彼の晝ハ我の夜我の晝ハ彼の夜あり所
以ありと云り大地の日夜子動る易る大凡如此し
○亦曰豊國野尊ハ豊國主尊子同ト已上子云り但
野ハ借字よて此耳ありず正書の豊斟淳尊の淳此の
諸の御名の野ふど皆同ト主の義あり事彼此相對
へて曉る可し備主ハ成爲して物ナを成し爲りて其物
子主宰て成る意あり又主を倒して條ニとも云り條ハ

字子てハ有レども其言ハ一も主と同一キ故に宝劍
出現章第一一書ハ清之湯山主三名狹漏彦八嶋篠と
申す神名を又云清之湯山主三名狹漏彦八嶋野とも
記されて凡ての御名ハ同一キが篠と野と換レる耳
又云と云へキ所よて外に亦も異あり所無けれども
右の篠と主と同一キ見レハ何レよりも切めて野と
云る事あり此ハ大國主神の亦名ありが八嶋篠ハ
名ありを曉可但此ハ地神今紀に依て亦名と之
の云あり其一書に此神五世孫即大國主神と有る
古事記の傳も共誤と見ゆ但此ハ此凡物事ハ一も
子用無キ事ハ此も事の序云あり成すに依て名有り名有り依て其行事の大小きも知

る者あり然レハ那須ハ又名為よて其名有る事を
為るを云あり大國主神の亦名を大名持命と申す名
ハ成あり其ハ古事記に其神言能治我前者吾能共共
相作成不然者國難成と有る照し見て知べし成ハ又
名有よて譬へハ國土を經營セレハ山と云名有り河
と云名有りて其ハ山を成し河を成すに依て物と名
と二共ハ顯ハるが如し然レハ此豊國主尊と申す
主ハ那須とて名為の義豊國野尊と申す野ハ那須の
引合して怒とこるに成レて其意ハ少も替りざる者
なり猶第一書あり天御中主尊の傳にも云如く
中ハ成處よて天地万物の成る處の義主ハ名

為して天地万物を造化して其主宰と坐す義あり
を思合す可一産業を那理と云ひ物の生出を那
流と云も此一同一傳三一物の下子物ハ諸名も未
其名て為べき事の出来ざるが故子物と云ひ又物の
成出後其を混同小して物と云事不云ひ又物の
の野の例よも又引出つ可あり老子云物混成先天
地生云く之を強して終つ吾不知其名字之曰道強名曰大
可有也無為小して成れ物不其故子何と云其精
甚真其中有信自古至今其名不変有也古より今
其神の閑衆甫て云て万有を造成し給ふ事止すと不
り又道可道非常道名可名非常名無名天地之始有各
万物之母と云道徳仁義の道非不非不非道と字
りぬ物然る者明ある物ハ道の本體を以て思及べき
万物を成て名有る其も凡俗の測知べうぬを云
り無名天地之始有る物無一物無ハ成す事も
無き故子天地之始有る物無一物無ハ成す事も
りて万物を造成し給ふと云る此等の名も云事我
古意子叶ふが故子引出たれども諸家の注ハ然らず

○亦曰豊鬻野尊の鬻ハ買子同トければ上の淳経野

豊買尊の下見ろ可ト又久比子来経の義も有べト古

事記日代歌小阿良多麻能登斯賀岐布禮婆阿良多麻

能都紀婆岐間由久と有る岐間是あり上云る天日

の周圍小在る大地の公運する氣脉小浮びて日夜の

動を為す一つハ漸次小来経る故小年月

日時を成すあり上の淳経も亦此子近ト又来経を經

往とも云り万葉三十九下小璞年之経往者ふと有て常

も多ク云語あり来経ハ万葉十五小安良多麻経月日

麻経吉倍由久等志とも年平曾来経ても有り十四小
阿良多麻経伎倍乃波也之と有る右トハ異子ト地名

今次の書に葉木國此
云播磨野尊と註で
り右に此の

あり物なり其意 ○葉木國野尊の葉木ハ借字にて運
を以流けたり あり宿運ハ毎日毎夜と息む事無く自私運を為つ
も公運の氣脈ハ運び送るを云ふり物を送る事を運
ふと云事ハ崇神天皇十年御紀ハ是墓者日也人作夜
也神作故運大坂山石而造則自山至下墓人民相踵以
手運傳而運焉神功皇后御紀ハ詣播磨與山陵於赤石
仍編船組干路嶋運其嶋石而造之宣化天皇元年御
紀ハ加運河内國茨田郡屯倉之敷云々又筑紫肥豊三
國屯倉故在縣隔運輸途阻ふと猶其外カも見元たり
但此等の運を引と云事ハ云木を運ぶを宮木引不
と云是なり 奇明天皇二年御紀ハ以船三百隻載石上

山石順流控引於宮東山累石為垣と有る四年御紀ハ
於舟載石運積為五と見え控引と運を並べたり
を見へ此久と波許と又近き語ト波許ハ歴來の
義多しを思ふ可し万葉一藤原彼民作歌子泉乃
河内持越流真木乃都麻千百不足五十日大尔作所
須良年伊蘇波久見者神隨尔有之伊蘇波久ハ勤
むふとト同ト物を勉強る辭と思へり此考成
て思へハ伊蘇ハ五十とて其茂の多き事波久ハ運小
事云る者あり然ルバ此御名ハ國を運輸義多し
事著明き者あり彼神代系記ハ葉木國尊と有て野
字悉く後子脱せり者とも見えざるハ然も傳ハル
あり可し但此御名を國常立尊の下子故めて其亦名
ルハ容易く信ひ難けれども ○亦曰見野尊の見ハ滿
又心得置べくあむ有けり

極まりて大地の萬物の生として満足へる義の御
 名あり然るハ其地動の神業に依て晝夜を成し豊雲
 小資て萬物の質を成せし其質を身と云て人ハ更不
 リ草木ふどふも幹と云ふ身莖ふども云ふ菓実をも
 美と云ふ其も身の義ありが實より幹を生し幹より
 實を結して止ざら故小人類萬物の満盈より由を以て
 見野尊と御名小負給へりし者多し傳三天地條小云
 りし精の説をも此小合せて精より質の成就はる事
 を不む思ふ可なりけり神代系紀に此御名を奉る
 七よりや此より其大造の績を建給へる故に漏
 事を知り可くして止事無き者ありを

二第

一書曰古國稚地稚之時譬
アルフミニイハクロイニニヘクニイシクツキイシカリシトキロタトハバ
 猶浮膏而漂蕩于時國中コトクシウキアブラノテマクラケナスタヨハロコノトキタニナカニナヒリ
 物狀如葦牙之抽出也モノノカクチコトクサリアミカビノヌケイウルカキヨリテコレニ
 因此マセリナリイワルカミロマテスウマシカシカビヒユ
 有化生之神號可美葦牙彦チノミントロウキニクニフトコクナノミントロウキニクニノサウキノ
 舅尊次國常立尊次國狹植

尊葉木國此云播舉矩爾可

美此云于麻時

國雅地雅之時ハ國土の未容貌^{カキツク}より以前の状を云り前ハ一物在於虚中状貌難言と云り是より此子國地と云るハ正書ハ洲壤と有^{コト}同ト物^{コト}ふ^{コト}彼ハ浮漂^{ウツク}する事^{コト}を云む為あり故^{コト}ハ洲壤の文字を以記^スル此ハ世の始の時を云出^スる耳あり故^{コト}ハ國地の文字を以書^テ其を見混^スふ^{コト}ト^{コト}思^ハ誤^リト^{コト}意味^ヲ

有^ル事^ヲ不^レト^{コト}よ^ク記^ス傳^三丁^二十^一國雅の下^ニ子國土^ハ伊邪那岐伊邪美大神の始^ニ生成^ス賜^ハル^ル此^ノ時^ニハ未^ダ然^ラズ物^ハ熟^キを如此^ニ言^フハ成^ル後^ノ名^ヲ借^テ其^ノ始^ノ状^ヲを談^ルル^{コト}なりと云^ル然^ル言^フハ^{コト}既^ニ虚^中子^ノ生^ル其^ノ即^ニ國^ト云^ハ地^ト云^ハ者^ハ是^レあり國^ノ常^ニ立^テ尊^ノの國^ト國^ノ狹^ク植^テ尊^ノの植^トハ國^ノ地^ノ元^ノ少^クて神^ノ名^ハ小^シも負^シ坐^スる^{コト}あり^バ彼^ノ二^柱神^ノより古^ク其^ノ稱^ヲ有^キむ事^ヲ云^フも更^ニあり^テ故^ノ爾^ノ然^ル思^ハ取^ルル^{コト}なり^ハ國^ノ形^ヲを成^セル^{コト}國^ノ名^ノの^出來^ル者^ト思^ハル^{コト}なり^ハ依^テ始^メて國^ノ地^ト云^ハ予^ハ考^テ得^ルたり^ハ説^ハハ^{コト}已^ニ傳^スる^{コト}云^ハ其^ノ見^テ曉^ル可^ク通^シ證^スる^{コト}或^ハ説^ハハ^{コト}國^ノ主^ハ大^ニ食^シ言^フ地^ヲ以^テ雅^トハ古^ク來^ル伊^邪志^ト全體^ヲ言^フと云^ハ更^ニ論^スる^{コト}足^ラず

公傳五評小此
 事委一く云
 り奥儀扱強
 ひみぢ見つる
 づらひとハ初て
 が見つると云
 るふりうひ
 胃うひ立替
 まいめなる事
 あり云く

讀む事と聞えて釋秘訓條漢澤小古事記を引くも國
 雅如浮脂の雅をも然訓りき神代口訣國雅地雅者國字比志也に雅者字比志
 也雅幼也と有を記傳三十九丁十九子も引れて其説に字比を約む
 れば伊と成れば然も有べし然れど伊志能時と云て
 ハ言の状協ハズ國伊志久地伊志伎時と引訓べきと
 云れば久ハ實子謂れたる言あり此ハ甚く文を約め
 を引り平田翁の古史徵も此字比志の訓を用ひる
 化たり然して此語を泥土煮尊子係る化たり然る
 言ふ伊志久ハ物の速あり状を云語めて即初る義
 あり古事紀高津宮段即歌小夜麻斯呂迹伊斯祁登理夜麻
 伊斯祁伊斯祁阿賀波斯豆摩迹伊斯岐阿波牟迦毛と

詠せさせ給へる伊斯祁ハ速くと云意よて山背子速
 け鳥山子速けと我愛妻子伊及逢む哉イシキと下子及
 逢む事を宣ひさむ料子伊斯祁ハ先歌ひ出し給へ
 りあり中昔の物語書あど子伊志久も申さるなりと
 有も其意あり物の速きハ事の始りて未成整ざら間
 ありケ故に字比志とも云ひ又約て伊志とも云ふか
 り鼻祖を字比又初子を字比子と云を始として初立ウダチ
 初陣又物の幼きを初しと云ひ未しき事を字比と
 云ふ常の事あり古今名物子我ハ今朝字比子不見つら
 あど詠は是子大凡ハ和詞志と云子近き語あがら

字比ハ幼稚の初より和訶ハ幼稚の盛あり此計りの
 差別ハ有る事あり纂疏ハ如人之幼穉迫於生時と有
 能も譬させ始へり未生ごろ子
 和訶志と云事無く已に生出て容貌れり
○猶膏膏ハ
 第六一書ハ有物若膏生於空中て見え古事記ハ
 上より統けて國稚如浮脂而有り國稚ハ如浮脂の
 體よて如浮脂ハ國稚の用あり事を知べく右の有物
 ハ上ハ一物と有る其よて其一物ハ此ハ國稚地稚と
 云物あり事を思ひ合す可くあり有けり記傳三二丁
 ハ此浮脂の如く漂蕩へり一物ハ何物すと云子是即
 天地子成べき物也して其天と成べき物と地と成べ

き物と未分れず一ハ清りて沌りれたりあり書紀一
 書ハ天地混成之時と有る是あり混とハ未分れず一
 清りて一沌あり事よて即此浮脂の如くあり物の始
 て生出たり事を混成とい云るありと有ハ然る言不
 り傳三澤沌如鷄子の下ハも云る如く大虚ハ氣あり
 も此膏の神を含したる物を精と云て彼雛子の如く
 小月も速るす午も障る物あり其氣も精も共
 聚る時ハ此天地と成り小く屯る時ハ万物と成て
 常在ハ天地も万物も生るとして息ぎハ極て微く
 極て細く精氣を産靈給ハ神業有る故あり而して
 其精ハ虚中ハ煌々として浮べる者あり即膏あり然
 ルバ氣ハ油子の如く精ハ油の如く産靈神ハ麻を迄
 て油を取者の如く右の一物ハ油を再熟して脂膏と
 成たり又記傳ハ浮脂ハ字伎阿夫良と訓べると云ル

春秋左傳曰膏者
 神之液也見素問
 之教之精液和而
 為膏也云云有精
 此似膏之事あり

たに此浮膏も其如く訓べきあり其も引れたる
古事記朝倉子大御蓋子槻葉の落浮べを詠る三重
妹の歌子本都延能延能字良婆波斯那加都延尔於知布
良婆閉那加都延能延能字良婆波斯那加都延尔於知布
良婆閉斯豆延能延能字良婆波斯阿理岐奴能美幣能古
賀佐の賀世流美豆多麻字岐尔字伎志阿夫良於知那
豆佐比美那許袁呂許袁呂尔と有る此歌共を其も天
語歌と有る大嘗の時子天語連と云ふ語部を率めて
奏す古詞を直し其時の事子取成して詠る者ふれば
上子云ふ事も唯歌の序ふ非るあり然れば秀枝中

枝下枝より葉の於知布良婆閉と云ふ天中より一物
と聚り成べき精の彼寄りカヨ此寄りカクヨ觸徑へ来るを云ひ
瑞玉蓋子字伎志阿夫良とハ其一物を云ふ阿夫良と
ハ大聚りて其精の大小聚れり謂あり右前子佐賀
世流と有る指上為りて氣の其を虚中子擧る事を知
せ次の於知那豆佐比ハ落泥障りて其一物の何方子
でも聚りてハ落ち合てハ泥み沈むと為るを指上
る氣子障りて終浮膏の如き一物と質を成故に皆疑いと云頭せり傳りて三神
造化の首を今眼前仰膽奉るが如く又其より初も
ハ中枝ハ葉を覆ひ下枝ハ鄙を覆へりと有る葉鄙ハ
歌の對子云ふて其ハ心無く唯天の事を云ふが

合傳二十一卷九十一
三丁小七云を
己ふも

其天ハ謂ゆり天中子て精氣の充たたり世の男りを
云ふなり布良葵開ハ万葉ニ上瀬尔生玉藻者下瀬尔
流觸經玉藻成彼依此依靡相之婦乃命乃と詠るも此
の語脈は類たり觸經の字の如く物小觸て又其物と
共子下延ふを云り源氏常夏巻子然採子も布礼婆比
の可き驗や有と尋ね訪うひ待る篇火子布礼婆比
給へる若菜上子布礼婆波世ま欲しけしふと有り物
の落着ぬ意子用いたり字俊志阿布良ハ楓葉の玉蓋
子浮べちを神代の古詞の合せ云ふなり記傳三子如浮
脂と譬たる其漂蕩る形状の似たりなり其物を脂
の如く多る物と謂ふハ非ずと云れたりハ其如字子
派子したり説みて此も上の葦牙の如く阿天良と云
一物の名を借て油子も脂子も膏子も流けたるを
再復譬てハ成る故子如と云ふなり然ハ右の三重
妹の歌ハ其漂蕩る状を譬へたり一事論無を此ハ真
子脂膏の如く有るなり猶此天語歌の事天語連の事
語部の事右詞の事ハ中臣壽詞講義 傍此猶浮膏と云
叢題第 十 條子記一置りきり一 傍此猶浮膏と云
一物ハ一も高皇産靈尊神皇産靈尊の産靈小資て

天中子成出たり物小て男女遺合して父母の精と精
と相感け合て胎中子孕りて一物成其状貌 難言と云べ
くして實子浮膏とも號く可き物ありが 神其中子生
て己子生産るに至てハ骨肉相具りて等しく人體を
成す如く凡て天地の初子異あり事無し浮膏の如き
人體を成す事ハ誰も知る事ありハ此を疑はずと雖
も天地の始ハ其初を見ざる故子人皆疑ふ事ありと
も己子鈴屋大人も玉勝間子云れし如く若くと云
物も古子出乘て今出来ざりせりも過るハ漢意ふど
のハ子云聞せたりむも然る理ハ非トふと云むを
此ハ幸子して誰しも自物為る事ふハ疑ハ出来ぬ
ふ可し隣 人耳ハ非ず萬物悉く然り活と一生る物
ハ禽獸虫魚の末子至すと體生卵生湿生化生の別有

と雖も其成出ら始ハ如浮膏物ありざるハ無く草木
小至ても亦皆然り其草木の種を土中子下せば天地
の氣此子相感けて一度ハ如浮膏ユ立復り其中より
萌芽事猶此浮膏より草牙の抽出るガ如し金石の
如く堅く硬きも亦浮膏の如きよりして體を成す事
亦右の如きあり 其ハ大地の浮膏より成化るを以て
土石子胎まり金も此を鎔化す此に金を成り又其
り銅と成り鐵と成れり如し 其鎔化せし即浮膏
より草木の枯朽て土と成り然り一度地上の濕氣子
依て朽腐れて如浮膏子成り其より 後土と成り事人
も見こ知れ 然れハ天地ハ其如浮膏物子成て又天地
の内子在と有ゆり萬物も悉く如浮膏物子生じて古

より今子至る迄今より後代迄も盡極る事無きガ産
靈神二柱の恩頼ありけり 顯宗天皇御紀子見えたる
日神月神の入り著りて天皇子令奏給へりし御言ハ
我祖高皇產靈尊有預鎔造天地之功と有る其よて此
子預鎔造とハ先天地と成べき一物を天中子生給ひ
其を天地と判て各其神をも生給いて天地を令鎔造
給ふ其神等子預ひ御在り坐て產靈の御功を建給ふ
事よて國土ハ更ふり萬物も各自の神御在せりガ
悉し預鎔造り坐と云義の御託言あり今も人の子を
男子女子と云ひ苔の生草の生と云ハ鈴屋大人の

凡て世間ニ在と有事ハ此天地を始て萬物も事業も
此ニ柱の産巢日大御神の産靈ヲ資て成出る者ナリ
と有る依事多ク其男子も女子も吾の生る草の生
る如浮脂物子成れども以知べし此ハ甚ハ奇異あり
事ハ中ニ一書ニ
一枚ハ書盡す可くも非ぬを委しくハ第四一書ニ
云むを其所此所ニも云ハて其意を盡し難キ故
あり此浮膏の傳説多クハ外国ニ且ても無キ
事ナレバ彼ハ小賢トキ心よて理を以云出る事の出
来ナトキ事多ク神代の傳説を仰ぎ
聞ク皇國人計り世ニ樂トキハ非ト
○漂蕩ハ正書子
浮漂と有る同ト其ハ上傳三五
十二下ニ云り偕叙秘訓ニ私
記曰此一書文已引古事記然則漂蕩平久羅下那洲多
陀用幣理止可讀也而多陀用幣理止訓其由如何と有

ハ古事記と同ト傳あり久羅下那洲を略きて唯多
陀用幣理と訓ハ如何と問ふる答師説古事記上宮
記大倭本紀等皆久羅下那洲多陀用幣理止云々然則
其説為先多陀用幣理止云々可為後説と有ハ古く亦
リ諸書ニ古事記の如く訓来りて却りて字の如く読
ハ後の事ナクあり又公望私記曰攝待郎宗依古事記
可讀云々而師不説之と有り正書
の浮漂の訓も右の如き其續キニ參議淑光朝臣云
論ハ有て其傳ニ云りき
或舊説此漂蕩二字平久羅下那洲知多多祁理止説於
今言之頗似有便と有る此知多多祁理ハ心得の説不
り如何あり意より思得べしハ古訓ニ從ふ可キ耳今試

強て説を成ひしハ如多、初理ハ和良、初理ハ
非、ク夕、ト、ト、片假字子て混ひ揚、子字、ル、ハ、有、リ
万葉ハ、秋芳子乃字、禮和、良葉、午置、有、白、露、と、有、リ
和、良、ハ、弱、く、し、く、和、多、義、と、聞、元、源、兵、若、菜、卷、子、和
良、ハ、加、子、氣、近、く、云、植、柱、卷、小、和、良、と、加、多、氣、も、無
き、人、云、し、と、有、を、河、海、秋、子、和、多、り、と、見、え、た、を、思、ふ
と、水、母、の、如、く、和、い、然、多、り、
○國中、有、物、と、正、書、子、天、地
之、中、生、一、物、と、見、え、第、五、一、書、子、海、上、浮、雲、を、云、て、其、中
生、一、物、と、有、も、同、ト、事、子、て、此、の、國、中、ハ、猶、浮、膏、と、有、
物、の、中、を、云、る、有、り、
第、一、一、書、子、一、物、在、於、虛、中、状、貌、難
言、其、中、自、有、化、生、之、神、と、云、る、其、中
其、同、ト、一、物、の、中、を、云、よ、ハ、有、れ、ど、も、其、り、別、子、成、出
る、物、の、有、し、ハ、非、ず、し、て、唯、神、の、成、坐、る、事、を、云、ふ、れ
バ、何、れ、り、其、國、の、内、有、物、ハ、次、子、云、葦、牙、有、り、然、れ、バ、此
子、て、の、意、ふ、り、有、り、
○國中、と、云、て、葦、牙、の、知、く、有、り、一、物、の、抽、出、た、り、ハ

其一物の根て有る女島の謂ゆる天一根と云ふ邊亦
る事上よ云るが如し然れば此國中と云るは指す所
有る者ありけり其ハ傳三状如葦牙の下及此卷の豊
子云三限子○状如葦牙之抽出也ハ第五一書子如葦
牙之初生涯中也とも有る同ト其状貌を細く説
れりあり此事古事記トハ如葦牙因前騰之物と見え
たれば其は合せて説べしと雖も抽出と云ひ初生と
云ふ少云様の異あり所有り記傳三子引れたりハ
とも共ト母延と訓れたりハ万葉十子春楊者目生来
鴨又此河揚波毛延尔家臣可聞と有り體多證も有
れハ然も有る不し事あり抽出とも初生とも又
書れたる撰者の心用ひも有る事ハ其字面を云

て有るへ抽出とい其牙の地上に見ハるるを云あり
 景行天皇二十八年御紀子王所佩劍自抽之雍攘王之
 傍草と見え万葉十三丁七劍刀鞘從拔出而伊香胡山と
 有るぞ抽出の例あり江次第相撲拔出の裏書子相撲
 人中拔出之令取相撲也と有る人を持り出すを擢と
 云子同上其擢ハ拔出の義あり文選擢の注子獨出貌
 也と注せり子華子左旋右抽軍由是以上也と有
 も行進む義あり通證子引る茶歌子先春抽出黄金芽
 とも見たり然れば右の摘浮膏にて漂蕩へり一物子牙を
 會りり一清陽あり如草牙物義薄靡き昇れ不事を
 上も抽出とい傳へたり一者あり通證子抽出形容
 生之勢と云れども

ふら但此因草牙
 て可美草牙形
 傳生坐一因草
 て因常坐草の生
 意ふらふり備此
 因草一高上在事記
 因作設是時有花
 依采之神と有る如
 草管に在る神靈
 の具草牙と有る
 子も草牙と有る
 成給へる者ふ

然る空理を云ふハ非ず
 此ハ其事實を云る者あり
 一書子も因此化神と二處子出たり一訣子因猶託也
 と有る如く物有り其子託て成坐るが故子因とい云
 第一一書子其中自有化生之神と有る物有れども
 状貌難言と有る故子因とい云ぬなり此も其同上
 物子有れども浮膏と云ひ草牙と云て己子其物の
 定れざるを以て因此と云り但正書子便化爲神と云
 い第五一書子便化爲人と有る此の因ハ依の對子て
 因此の例子非る事其子註すが如し因ハ依の對子て
 自他の別有るあり譬へハ四神出生草第十一書子伊弉
 諾尊勅任三子曰天照太神者可以御高天之原也月夜
 見尊者可以配日而知天事也素戔嗚尊者可以御滄海
 之原也と有る日神も月神も其物子因て成坐る神不

今分葉下り山神の奉
御調等云々川之神
大御食任奉等云
依奉流神の御代
鴨見其具及歌子
山川毛因奉流神長
柄云々詠又世子
食國半奉之賜等登
と上云々對下
天地毛縁而許
曾と云々因の義
明々々々

るさる故に父尊の御依しを得て其神と成給ふあり
然れば他より任らるて其物に託し依あり古事記詞
あり神の御言に西方有國云々吾今歸賜其國と見え
忘神天皇御記に任大山守命令率山川林野ふどの類
是あり但此に因に依の對へる事を知らむ因此自有
為に聊云々こころ有れば此を盡せざるなり
其物に縁て物と俱に生坐るを云ふり物に果るを寄
と云ふ彼より來て此に俱に成る故に然言あり物を
装ひて其形容を足らすを万葉一丁子取與呂布天乃
香具山と云ひ具足を與呂比と云ふ右子同ト因を由
て因縁ても由縁とも熟す字あり子華子凡物之
有所由者事之所以相因也理之所以相然也軸之軸車
由是以運也紐之紐絲由是以相屬也姓由之由族由是
以有分也楯袖之袖味由是以有別也宇宙之宙理由是

以有傳也糸之油油穀由是以登也雲之油油雨由是以
降也憂心有軸心由是以動也左旋右抽軍由是以止也
故物之有所由者事之所以相因也理之所以相然也
見えて因と由との義を悉く此に盡し究めたるあり
或説由甲申世の字共子日の變體にて一と一とを以
て形を成り上下縁る所有れば由と成り下と物有
て甲とあり上下と通りて申と成り横と貫きて母と
成れば者ふと云ふハ大主據有り傳三神聖生其中
焉の下見古語ハ高天原ハ神留坐と云て凡て此天中
合す可し
ハ天御中主尊の神隨あり奇靈子微妙あり大御靈の
天地に先立て御在り坐す其大御靈に資て二柱産靈
神の成出給へり一より萬の神も又其産靈に因て
成出る物あり事誰も知れず如し然して隱身の神
ハ天地を身體として天地即神の御身あり事猶現身

坐事云云と茅三一書ハ天地混成之時始有神人
 爲て見えたり矣三神の造化子資て産靈び給へり
 一物ハ因て始て成坐ルハ必然と傳へり來り其
 一物ハ浮膏と葦牙と未相分ルハ間あるハ其を
 此神ハ係む事ハ如何なる如く思ふハ人ト有ふハ
 混濁たり一正書ハ含牙と云り含とハ其一物の中
 と別ルハ一書を云ふハ其一物ハ依らずと云事無
 麻時と有る可美ハ後子物を美稱へて然云子依て此
 字を當るハ乃ち云々有けれ其義子轉ルハ後
 さて此二柱神の産靈子因て其一物を天中子生成
 給へり一子起ルハ御名をて于麻時ハ大聚成子て天

合云ふが如く諸其
 物と成れり積字
 麻の語有る故に仁
 徳天皇御記の
 然訓せたり

地と未相分ルハ其全體少異ハ物なり事右少引る
 天地混成之時始有神人爲の文を以曉々可一の容
 成すハ大子彼精と云る物の聚在り圍若て其物小牙
 在が故ふる事傳一如雜子の下ハり
 を含む少至りて彼ハ加浮膏少成て止まり此ハ如葦
 牙少成て其中より抽出るが彼大地の陰門と云べき
 女島の天一根より萌騰ルも亦母の子を産む状ふ
 り一ハバ此少至りて于麻時ハ生産成の意ハ成ル
 りけり小聚ガリ成たる物の出来ルハ即其事の名
 とハ成ルハ事ハ此あり宇宙ハ物の其物上り極りて天日と
 成り又別れて恒天と成れり于麻時ハ大聚成少後り

合蕃息字允茶天皇
 皇御紀に見え雄略
 天皇御紀に産兒
 の字をも然訓せ
 たりき

る千魔を釋ハ稱美物之詞也と有り又蕃息の二字を
 宇麻波流と云ふ産ハて子孫の廣くある義なり又通
 證ハも有味曰可美典産生熟音等字
 訓義相通と云ふハ皆同義の故なり葦牙ハ譬ハ如葦
 牙と云ふと此ハ同ハ一ハなり事傳三清陽及状
 如葦牙條ハ
 云ふガ如ハ又正書ハ含牙ハ有ハ其混成一時より萌
 騰ハじハ為ハ氣機ハ有ハぶハ未抽出ハざりつるを今
 抽出ハ形貌をハ葦牙と云ふ葦ハア明ア清ア正書ハ
 其清陽者藻靡而為天と見えたり清陽此ハ同ト牙ハ
 凝精ハて正書ハ精妙之合搏場と有ハ是ハなり此ハ依
 て天先成り地後定れり時ハ其天地の成れり状を見
 行ハ神等の其萌出ハ状ハ何ハ甚能似たりけり草

をハ葦ハ流ハ號ハせ給ひて其如葦牙ハ傳ハせ給ハ
 せ給へりふらハ神名も其を以て後ハ稱奉れり如ハ
 思ハ事ハ成ハなりハ又神名の上ハてハ體用
 清凝精ハと云ハ體ハ天童ハ凝ハ時ハ云ハ用
 事傳三ハ如葦牙ハ下ハ下ハ已ハ云ハ子ハ古事記ハ萌
 騰ハ之ハ有ハ其一物の中より出ハ清陽ハ精妙ハ
 精氣ハの精妙ハ合搏ハ事ハ云ハ萌ハ聚動ハて火
 事と燃ハと云ハ此ハ同トハ其氣機の勢を得て震動
 子出ハと云ハあり寔ハ世間を照す天日ハ成ハ物ハ
 此ハ盛ハ燃ハえ進ハけハ事ハ云ハ更ハあり又物の殖ハを
 由流と云も同語少て其抽出たりハ地ハ小ハなり

今此大屋に在り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り
 此引て天に成り

ハ彼より此方に来る事と思ふのれども秀を比伊豆
 流と云も延出^{ミイッ}る義ありと比古ハ歴来^{ヒコ}して彼も此
 にも云語ありけり比久を比古て云例ハ古事記八十
 矛神の御歌に比許豆良比と詠せ給ひ源氏権巻^{ヒコ}に良
 久しく比許と宿水^{ヒコ}に比古と可^{ヒコ}し非^{ヒコ}ねハ夕霧^{ヒコ}
 卜^{ヒコ}る程と宿水^{ヒコ}に比古と可^{ヒコ}し非^{ヒコ}ねハ夕霧^{ヒコ}
 惜^{ヒコ}しがほ^{ヒコ}る比許と可^{ヒコ}し非^{ヒコ}ねハ夕霧^{ヒコ}
 神天神引出萬物者也と有^{ヒコ}天神の方より引出
 萬物の方より引出^{ヒコ}申出^{ヒコ}せし^{ヒコ}此の比古と可^{ヒコ}し非^{ヒコ}ねハ夕霧^{ヒコ}
 漢文の比延字を比伊豆^{ヒコ}宿上より可^{ヒコ}美ハ生産成
 讀^{ヒコ}るハ比伊豆^{ヒコ}宿上より可^{ヒコ}美ハ生産成
 て浮膏より生産に分^{ヒコ}るを云ひ葦牙ハ明清^{ヒコ}疑^{ヒコ}猪^{ヒコ}子

て其萌騰る物を云ひて其條理甚明ありと就^{ヒコ}て猶熟
 思^{ヒコ}ふに比古屋ハ日凝立の義^{ヒコ}と歸^{ヒコ}めり若^{ヒコ}て其葦牙を
 引上^{ヒコ}りて天日を造立給へる意と成^{ヒコ}あり國^{ヒコ}も
 語有り他國の餘りを以て此國を不足^{ヒコ}る處を縫造^{ヒコ}る
 事あり出雲風土記國引の文に國引生ハ東水臣津野
 命詔ハ雲立出雲國者狹布之堆國在哉初國子所作故
 將作餘詔而擗^{ヒコ}義志羅^{ヒコ}死乃^{ヒコ}之^{ヒコ}埼^{ヒコ}矣國之餘^{ヒコ}ハ有^{ヒコ}耶見者
 國之餘有詔而童女胸鈕^{ヒコ}所取而大魚之支^{ヒコ}太^{ヒコ}衝^{ヒコ}別^{ヒコ}而波
 多須^{ヒコ}支^{ヒコ}德^{ヒコ}振^{ヒコ}別^{ヒコ}而三身之網^{ヒコ}打^{ヒコ}控^{ヒコ}而霜^{ヒコ}黑^{ヒコ}葛^{ヒコ}園^{ヒコ}耶^{ヒコ}
 尔河船之毛^{ヒコ}曾^{ヒコ}引^{ヒコ}是^{ヒコ}引^{ヒコ}束^{ヒコ}續^{ヒコ}國者云
 今者國引詔と有^{ヒコ}引^{ヒコ}是^{ヒコ}引^{ヒコ}束^{ヒコ}續^{ヒコ}國者云
 今を以て天の引上りて成^{ヒコ}備^{ヒコ}葦牙の角^{ヒコ}芽^{ヒコ}出^{ヒコ}たり
 此を以て天の引上りて成^{ヒコ}備^{ヒコ}葦牙の角^{ヒコ}芽^{ヒコ}出^{ヒコ}たり
 ハ女島の天一根より成出たり其状を葦牙と云
 ハ今も葦の芽^{ヒコ}出^{ヒコ}るを見^{ヒコ}て實^{ヒコ}に小兒^{ヒコ}ぶどの男^{ヒコ}根^{ヒコ}の

勢り出たりか如し然れば男を比古と云ふ此神の男
神ありと起り女神と對入て古事記は八千矛神をも
火遠理命を比古遲神と申すハ女島の天一根子對
ひて可美葦牙の彦鬯子在せり子起れり者こそ所思
かり比古比賣の男根女陰あり事ハ大戸之道尊大戸
之邊尊の傳子云を見へし傳三天先成の下より引る前
芽の下より云ふ事共を合せ讀めりむ○次國常立
更に疑ふ所無り可なり所思えたる
尊ハ葦牙より此神の成坐りとも非ず上より猶浮膏
と云ひ次子如葦牙之抽出と云ひ其物の次第ハ云九
れども正書にも天先成而地後定と有る如く可美葦

牙彦鬯尊と天地に分れて浮膏ハ國常立尊ハ成坐り
由の傳より第六一書ハ天地初判有物若葦牙生於空
中因此化神號天常立尊次可美葦牙彦鬯尊又有物若
浮膏 生於空中因此化神號國常立尊と有る校合せ
て其然る所由を知へし此子就ても正書及第六一書
事ハ可美葦牙彦鬯尊を有
事ハ可美葦牙彦鬯尊を有
曉り得難此子就ても正書及第六一書
葦牙ト直に便化爲神へ統けて其を國常立尊の出
自と成すこと氣疎かりければ右の如く見たりむハ
可美葦牙彦鬯尊の出自を何れよりと爲む心行の
事ありけり延喜六年竟宴得國常立尊藤原朝臣春海
葦牙の浪の芽も遠く天津日嗣の始めと思
へばふと昔の人と雖も斯く誤ハ有る況て後世の
識者○國狹植尊傳三八十出

一書曰天地混成之時始有

神人為號可美葦牙彥舅尊

次國底立尊彥舅此云比古

居

天地混成之時とハ正書ハ天地未割陰陽不分渾沌如
雞子と云ひ第一一書ハ一物在於虚中第二一書ハ古

ハ古事記と同ト状トて猶浮膏而漂蕩也と云ハ此ハ
て天地と未判ルナリ一問を云ふハ此等ノ事共ハ各
ルバ其時を扱きて 記傳三二十ノ混とハ未分ルず
て清りて一沌ナク事トて即此浮脂ノ如クある物ノ
始て成出タルを混成と云ふと云ハ九ノ如ク其
如葦牙く一て萌騰りて天と成ルル也 即其浮膏の中
よりありガ故ハ其を指て混成と見ルハ一ハ實ニ然
る言ふハ 混成ハ渾沌ト目トキ事傳三ノ註セムガ如
而不改周行而不殆以為天下母五言不知其名字之曰道
強名曰大と見エタル物ハ此ノ一物ナリ先天地生ハ
天地ハ後ト判ル者ト云ハ一物ハ後ト天地と成
ル者ト云ハ一物ハ後ト天地と成ル者ト云ハ

周行而不殆其物の漂蕩て空中に在るを云ふ事
為天下母てハ先天地主の對へて天地の成れし事を
云ふ事此ハ正しく神典の古傳を受て云ふ語あり
赤縣太古傳の右の物を無始無終の物として北辰の
事と為るハ漢意なり ○始有神人焉ハ高皇產靈
尊神皇產靈尊の產靈を資て始て混成る一物成り其
子依て其^{出來る始より其神}を御し始て神も共て成生りてあり次の一
書に天地初判始有俱生之神と有る大凡の意味同ト
うろ可し但此二の始字大に力有り其ハ一物の成記
た多し因て成生るありず一物の出來ざりし始より
神人焉と有りて其始を成し始る事を傳へたる古
語ありハ其意を得て波自來與理とハ讀べりけり

此を波自來と訓む時ハ混成す物の成出たる時
始而云意ありは上因此の所云如く
因ハ縁にて其物を由縁として神の
寄託給へるを合せて此始を解べし有神人の神人ハ
正書に便化為神と有る第五一書に便化為人として
此をも如微て訓むを合せて神人と書れたるは正
書に神聖と有る同ト義あり私記に問神者何哉聖者
何哉答神聖者是下文所謂數箇神人也或曰神或曰之
聖並是通号耳と云ふを以て人字比登とい訓すト
所多しを知べし但上古小神をも人て云ふ事有り
命子頃者人雖多請と有るハ必比登と訓へし所あり
り口訣に神人訓嘉美と云ひ通證にも引る列子に幾
神人哉と有り此神人の有る麻世理と訓べし生有の
字の據ありけり者あり

意あり口訣子此言自未分而有神之理也と有れども
有神之理を云ふハ非ズ有神之事を記し傳はれらる
者ふれハオホコト疎略ヲ見らる可くす未分よりして神の成
り御在し坐りと云義を傳はるの有が中にも殊子眼
を著べき所ふあり有を麻類と訓らるハ古く其意を
天原所生神名の所に又も此事を註す可し○號可美葦牙彦尊上三十
出たり此神の出自ハも上も云如く混成す物を
り牙を含りて萌騰れり物子因て成坐りと雖も然
る細くと為らる事ハ云ずして大オホ朴ヲ如此くも傳は
れる者ふり事の序ふれハ此神の亦名を説可し若て
中臣

△あり傳三ハナリ
網の事を註せ
るを此の合せ
考ふ可

忌部二氏の出自ハ此神に坐を日神の石窟改し至て
ハ此神の末と坐す中臣神忌部神の招奉りし感
けて出坐る事ありと云知ず妙多事共多在り
此ハ此傳の始終と云事ふり先心得置べし神名式
子出雲國神門郡比布智神社同社神魂子角魂神社
有り姓氏録山城國小鏡部神魂命子角疑魂命之後也
と有て合れハ決く亦名あり可き事下其名義を説
く耳ありず神魂命子と有を以定む可し出雲風土記
社又比布知社あり記されて神名ハ載しれずと雖も
社号を比布知と云ハ此貴ありの意もや有べく
一本の姓氏録ハ又同録河内國小委文宿祢角疑魂命
之後也又右京鳥取部連角疑魂命云之後也と有り
又魂字を省きて同録山城國小鳥取連天角已利命云

之後也又左京神別雄儀連角凝命云々之後也亦も見
えたり斯ルハ角凝魂命の凝を省きて角魂命と申し
魂を省きて角凝命ハ申すありけり但此等ハ角凝
其子孫の事を云ふハ唯神名耳を出せりあり神
祇伯仲資王記建久五年六月十二日阿波国忌部之
家還補氏長者角凝魂命之後也此有リ此事宝鏡開
始章第三一書業国忌部の下註す可鈴屋大人ハ
右の神名を角杖神ありむと云れたり也叶はず平
田翁ハ天底立尊の亦名と為りたり共ニ事實ニ
合ハ角凝ハ葦牙と同義あり葦牙との芽むを角具年
と云如く清陽あり物の精妙ありが聚り凝る意あり
事已上子神名の葦牙の義を説るを以知べきあり
傳三天先成條ニ引るが如く和名抄ニ葦蘆之初生也和名

△本草和名中も
蔬首和名古
毛都乃と有り

都
△和名抄近江國
高島郡角野
郡乃土佐國長
國郡大角於保
都と註せらるる
以て都奴を都
と云事知べし
然れハ綱と云し
角繩の義あり
可一若て

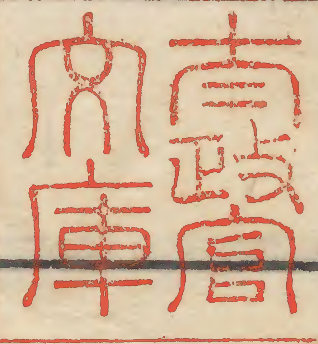
阿之豆乃と有を鈴屋大人の是葦牙ありと云れたり
如く葦蘆其葦牙を正書ハ含牙と云て牙を以名と為り
を以て角を以も名と為べき理あり事を曉可一若
て此角の延へて天日と結り成り其より又綱と成別りて四方上下薄靡き廣
がりて結び八十結ハりて天極ハ成れけりけり
故子天ハ綱の義ありとハ云あり此角凝魂命と申す
この成定れり意を明可き御名あり故子此計り子
ハ中子盡し難うり上の天先成の傳ニ合せて曉
る可き此考成て思ふ子津速産靈神と申すも同神子
て津速ハ角生子て葦牙の萌騰れる義あり△同神あり
と云證ハ舊事紀ニ別高皇産靈尊次神皇産靈尊次津

速魂尊と有て可美葦牙彦舅尊の在處に允當り古語
 拾遺異本に天中所生之神曰天御中主神其子有三男、
 長高皇產靈神次津速產靈神次神皇產靈神と有る其
 三男と云ひ津速產靈神を二神の中間に収るる事と
 ころい安ありけし右の舊事紀に合すれば其次に在
 べき事所知れ又通本に高皇產靈神是皇親神 留伎命 次神皇
 產靈神是皇親神 と有る此に比ぶれば弥錯乱あり事知り
 る 三男を安ありと云は上の二神に神留伎命神留弥
 命と並坐て夫婦の神に渡りせ給ひ又可美葦牙彦
 舅尊にも有る津速產靈神にも有る右の二神の御子
 坐せば其を計へて三男とい語れ無き事あり姓氏
 録石京神別伊弉部高唱年須比命 三世孫天辭代主
 年之後也と有る天辭代主年興台產靈神の亦名ふ

ろが其三世ハ舊事紀に津速魂尊見市子魂尊見興
 登魂命と有る教に合する高皇產靈神皇產靈神二
 柱よりして生給へる神なるが故に若て津速ハ角生
 高唱年須命三世孫とい云ふなり若て津速ハ角生
 て其ハ葦牙の事ありを其物即天日と成り其より別
 天ハ一も形の如く成訖たり其天日を津速の本處
 として別天の壁立極るふ至る迄も引聯りて在る故
 小日天の氣ハ別天子通ひ別天の氣ハ日天も通ひて
 陰陽二柱の產靈の靈威を資けて天中子神靈の神積
 り弥綸ひ坐るが故に此神も產靈と申す中名ハ員
 給へる者も有けり又姓氏録未定雜姓葦田臣條子
 よて產靈を武須昆と云ふ物も結ひ合する事ハ疑
 と其意通へり猶此神と大產靈神の相混り坐る事

と人身の靈府津液の神多々所申の委一事ハ祈年
祭譜義生魂神の下二已三注一今亦宝鏡開始章第三
一書興台産靈神又神名式御巫祭神八座の中二生産
の傳三云一ベ一此神多々姓氏録河内国子恩智神主高
魂命児伊久魂命之後也と有其ハ同式ハ河内國高
安郡恩智神社二座名神大日次相嘗新嘗と有其神主多々を
三代實録子恩智大御食津比古神恩智大御食津比咩
神と有ハ天兒屋命の玄孫大御食津臣命夫妻を祀ル
社多々を以思ふ子其神ハ子孫ニて其祖神を持
齋くあり然ルハ其系を原ニ訴りて見ニ高魂命の子
と直ニ指云ハキ神ハ又津速産靈神を除テハ非ル事

上小註セル如クありバあり舊事紀子神皇産靈尊兒
有テ津速魂尊と別神と為リハ明ニありハ故ニも有ルベ
けれドも神皇産靈尊兒と有ハ世數の疑ハ無ク似タル
生ト氣息の名多ケ右の津速産靈神の津速も同
トク此天中ニて日天より別天へ別天より日天へ互
小氣息の往来ニ故ニ宇宙ニ萬物の生トして息ニ寄
ルハ天中の活物ニ居リ活物あり故あり備此神を
皇御孫尊の大御守護の神と齋奉スセ給ニ事ハ右の
如ク氣息の神ニ坐ル故あり事多ト已ニ祝詞講義ハ
説ルガ如ク瑞珠盟約章あり五男三女の事ハ五男と
治津彦根命ハ天津彦根命の亦名あり天津と活津
と對ヘルハ天の徳ハ氣息を以テ物を成スガ故あり



此ハ此子預々ぬ事あるも生れの義を知らせむ為ニ云
 あり御門祭詞講義掃略備命の下ニ云々久志の事を
 も思ひ合 ○次國底立尊上傳四ハ出諸此傳ハ天地の
 混成す時の事あるハ葦牙と浮膏とハ未判れざり
 間ありけれども彼ハ牙を合ニ此ハ凝場ニ可キ氣撥
 有ガ故小始より天と地との神ハ有リと傳たれり
 此ハ其混成す物をニ子別て天子可美葦牙彦皇尊地
 子國底立尊と云意みて第二一書ハ浮膏と葦牙とニ
 物を云て其子成坐る天地の神の事を續けて並擧た
 ると其言ハ反様ありとも趣ハ同トキ者あり然して
 所も同トキ一途ニ成あり古文を見れば文字の上ハ
 唯目標耳ニころ有けれ語と意ニ斯る文ハ有けれハ

明治七年七月二日校合下 菅政友

